暁星学園同窓会事務局 jimukyoku18@gyosei-ob.org 03-3263-6448

会員の皆様へのお願い

・記事の転載等はご遠慮ください。

会誌「暁星」などの発行物や、同窓会ホームページに掲載されている記事・写真などに関する著作権・肖像権等は、当会および第三者の権利として保護されています。

無断での複製、転用、転載などの行為をすることはできません。

・同窓会費の納入をお願いいたします。

同窓会の運営は、会員の皆様からの会費で賄われています。

会員の皆様へのサービス向上や、よりタイムリーな情報提供を行うために、同窓会費の納入にご理解ご協力のほど宜しくお願いいたします。

同窓会費は、以下の銀行口座にお振込いただきますようお願いいたします。会報「Etoile」や会誌「暁星」の送付時に同封しております振込用紙をご利用いただくと、振込手数料が不要です。また、同窓会事務局でも承っております。

ゆうちょ銀行 ○一九店 当座 014791 みずほ銀行 市ヶ谷支店 普通 1538447 三菱UFJ銀行 飯田橋支店 普通 4659105

※振込時には、氏名とともに会員番号(7桁)または卒業年(4桁)を 入力ください。

ご不明な点がございましたら、同窓会事務局までお問い合わせください。

会員の皆様にご協力いただきたく、お願いいたします。

一暁 星



Etoile du Matin
2023
Vol.63

2022 年度中学一年生における 「エトワールコース」について

フランス語科主任 小暮 豊

フランス語科において、4月より新たな試みを開始しています。校名にある仏語の「星」をそのまま冠し、エトワールコースと名付けました。ただし、従来と異なる新規のコースを開設したわけではなく、「一外仏語」における新カリキュラム開始の機会を画して暁星ならではの名前を選び、新たな装いを施しました。以下、その概要をご紹介いたします。

①直接教授法を視野に入れたバイリンガル教育

第一の特色は、バイリンガルコースにあります。直接教授法的アプローチを採用し、段階的に仏語のみの授業へと移行していきます。また、フランスが世界中で実施する Delf 試験を一つの指標として、4技能の観点からの仏語力測定と生徒個々の到達目標の設定を行います。中学3年間での目標は、欧州言語共通参照枠(CECRL、英語の CEFR)のA2レベル、高校3年間ではB1と中等教育では最上位でフランス留学への道も開けるB2を想定しています。これらの目標は到達可能ではありますが、授業時間数は従来通りの週4時間(日本人教員)と2時間(ネイティヴ教員)であるため、学習への確かな動機づけとカリキュラムの見直しが必要となります。

る予定で、近年スイス大使館との交流も実現し、 2022年秋には新たな仏語圏の代表を学校にお迎えします。世界各地の仏語圏をも見据えた非言 語教科の導入は、当コースにおけるバイリンガル的方法論と車の両輪だと考えています。このような異文化理解学習を深める過程で、生徒達には日本文化の理解と情報発信のための基礎知識や技能の習得も促せれば、と願っています。

③エトワール活動

座学とは異なる多様な活動を通じて、通常授業との相互補完的効果を目指します。具体的には、仏語劇(他校との学習発表会の仏語フェスティバル等)を始め、在日フランス人学校との交流、さらには2024年のパリ・オリンピック、パラリンピックを視野に、来年度に向けてパリ近郊の中学校生徒とスポーツをめぐる交流の計画もあります。

これらに加えて、美術館・博物館等の企画展や映画鑑賞を通じた学習活動、フランス国内の文化行事との連動企画も検討しています。「歴史遺産の日」、「音楽の日」(以下の写真参照)、「報道週間」、「美術館の春」などです。

エトワールコースは、中高6年間で培った複言語 運用能力、異文化理解力を武器に、多様な価値観の 発見と獲得のために生徒達を支えていきます。

②非言語教科 DNL(Discipline Non Linguistique)の導入

第二の特色は、このカリキュラム強化に関連しています。授業の一環として非言語教科を設定し、これに「社会」(歴史・地理等の科目)を充てます。上述の通り、学習対象である仏語そのものを学ぶだけでなく、仏語を授業の使用言語とするアプローチを進めますが、この過程でフランス本国以外の仏語圏=フランコフォニーの学習も組み入れます。フランス大使館を筆頭にこれらの国々、諸地域の関係者との交流も図



マリア会幹部による学園訪問

5月6日(金)にマリア会ローマ総本部より、総長アンドレ・ジョゼフ・フェティス神父様、霊生局長パブロ・ランボー神父様、教育局長 E・マキシマン・マニャン修道士、財務局長マイケル・J・マッカワード修道士が暁星学園を訪問されました。

中学高等学校では、1時間目は英語(通訳:北村 先生)で中学生、2時間目は仏語(通訳:小暮先生) で高校生に対して一行の紹介の後、教育局長である マニャン修道士より、マリア会教育が目指すことに ついて講話がありました。

中学生は2年岡部裕太君が英語で、高校生は2年 山﨑文翔君がフランス語で歓迎の言葉を述べまし た。

その後一行は、全校児童が朝礼体系で並び、「アーメンハレルヤ」を歌って歓迎する小学校を訪れました。学校長による仏語の歓迎の挨拶の後、南津君(6C)が英語で歓迎の言葉を述べました。その後、総長様からご挨拶の言葉いただき、ステラの6年生、松山君(6A)阿保君(6B)粕谷君(6B)宮尾君(6B)が仏語での挨拶を添えて花束贈呈を行いました。更に、閉会の歌として「あめのきさき」を日・英・仏の三カ国語で歌い、全体会を終えました。

児童が校舎内に入った後は、校舎内の施設や教室 を訪れ、児童達との交流もしていただいた。

一行が最後に幼稚園を訪れた時は、ちょうど年少の降園でした。園児や保護者は、「ボンジュール!」「ハロー!」と挨拶や握手で歓迎の気持ちを表していました。コロナ禍で工夫した年長児のお弁当の様子を参観されました。園児の作品や、遊びの環境をカメラに収められました。

この日の午後には、学園全教職員に対して研修会が開かれ、以下の10点を中心にマリアニストスクールが育てたい生徒像、教師像についての講話がありました。

- 1. 身体と環境が調和した人
- 2. 内面性を育むことができる人
- 3. 喜びを糧として生きる人

- 4. 愛し、愛される術を得た人
- 5. 自らの選択を実行できる人
- 6. 職業面について訓練された人
- 7. 多元的社会に開かれた人
- 8. 物事に対して自主独立の精神で自らの立ち位置を確保できる人
- 9. 他者と連帯し、変革のために行動できる人
- 10. 神に対して開かれた人

「暁星」で学ぶ生徒、働く教職員にとってそれぞれ の意味について、あらためて考えさせられる1日 となりました。







(本記事は、暁星学園報第33号からの転載です)

菊地功東京大司教様のご来校

毎年1月22日には、マリア会の創立者「福者シャミナード師の祝日」を祝います。今年は前日の1月21日(金)に菊地功大司教様を小学校の「シャミナードデー」の講師として暁星学園にお招きしました。第一部はチャプレン司式の「シャミナードデー記念ミサ」を捧げ、第二部は、大司教様に学園講堂で5、6年生にパワーポイントを使って話していただき、4年生以下の児童も教室でオンライン形式にて参加しました。

神言会の新司祭としてガーナ(アフリカ)での8年間の宣教活動の体験、管区長を経て司教に叙階され、「カリタス・アジア」の責任司教として、困窮地の視察訪問や物心両面での支援と連帯、いのちの尊厳と回復への取り組みの一端を学ぶことができました。

お話の中で、フランシスコ教皇の「シャボン玉文化」の例えが印象的でした。「私たちは、綺麗なシャボン玉が好きですが、パチンと壊れると何も残りません。現代人も、衝撃的な出来事が起こると、当初は一斉に協力しますが、日が経つにつれて忘れ去ってしまいます」と。大司教様ご自身も「『あなたは俺たちを見捨てた!』と難民キャンプや仮設住宅の人々に叱責されました」と苦笑しつつ述懐されました。事実、難民や被災地の復興には、「即効的な『ウルトラマン』的援助は勿論ですが、『ドラえもん』流の地道な自立化へ粘り強い寄り添いと同伴の方がもっと必要です」と示唆に富む言葉を残されました。



第三部は、東京教区の大司教長の立場で、カトリック教会と教育施設等が、様々な困窮者にとって、いつも寄り添える「野戦病院」であって欲しいと念を押して小学校訪問を結ばれました。

(本記事は、暁星学園報第33号からの転載です)

創立 125 周年記念事業準備室 からのお知らせ

学園事務局長 兼 125 周年記念事業準備室長 和田 信之(1979 年卒)

本年8月、「聖堂修道院棟」(第II 期工事フェーズ1)の引き渡しを受けました。その後、必要な新規備品等の搬入と設置、旧聖堂等から引き続き使用する備品等の移設と設置などを行ったのち、残置物品の処分なども行いました。その結果、9月からは生徒たちも逐次使用ができるようになり、10月のエトワール祭では一般にも広く公開され好評を博しました。

この聖堂修道院棟は、学園聖堂として活用する部分、暁星ミッションセンター(略称「GMC」)として学園の宗教活動等に活用する区画、そして純粋に暁星修道院としての区画に分かれることになります。

写真は、聖堂正面を2階後方から写したものです。 正面の十字架は新しく作成しましたが、左右のマリア像とヨゼフ像は旧聖堂のものをメンテナンスしたのちに移設しました。また、側面にありますのは十字架の道行の絵です。こちらもそのまま移設しました。

祭壇についてです。旧聖堂の大理石製のものは、 重量がありすぎて移設が困難でした。このため、これをスライスして貼り付けるという形で、完全に復元することができました。この祭壇ですが、正面の 壁際まで移動することができます。そうしますと、 広い舞台のようにもなり、聖歌隊の発表などでの使用も期待されています。

この他、空調については新講堂と同じ床からの吹き出し方式となっているほか、映像投影用の大画面も備えた近代的聖堂となっています。

まだご覧になっていない OB の方は、是非一度、

この新聖堂に足を運んで下さい。そして、この光が 溢れる聖堂でともに祈りを捧げてみて下さい。

続いて、これからの工事の予定をお知らせします。 10月からはプールに構台をつくり解体用の重機材を 設置していきます。そのプール方向から旧聖堂と修 道院を解体(減築)していきます。その後には、部 室や家庭科(調理)教室などが整備されていきます。

来年度(令和5年度)末には、長かった創立 125 周年記念事業にともなうこれら一連の工事が終了する予定です。その翌年度は、各種の補備修正工事や完成1年点検を行い、令和6年度末をもって 125 記念事業準備室は任務を全うして閉鎖をする予定です。

ところで、125 記念事業準備室としては、これら創立 125 周年記念事業を広く周知するため、暁星学園 HP の一部に「125 周年記念事業 近況報告」を2014年(平成26年)4月に立ち上げました。その後は、断続的ながら進捗状況を紹介していき、この記念事業が具体化し始めた2016年(平成28年)6月からは写真も添えながら毎月アップを行うように致しました。皆さまの一層のご理解が進むよう、ご支援の心の琴線に響きますようにとの願いでした。

今からでもすぐに暁星学園 HP をご覧いただきますと、この 125 周年記念事業の歩みの歴史が全てご確認できます。是非この HP をご覧頂きながら、本事業終了まで、より一層の応援を頂ければと思います。



サッカー部活動報告

暁星高校サッカー部

主将·高校3年 臼倉 琉晴

高校の主将の臼倉琉晴です。今年度の高校サッカー部は3つのカテゴリーに分かれ、T3リーグ、地区3部リーグ、関東U16ルーキーリーグ、TU(東京ユニティ)リーグに参加しています。

練習に関しては、各カテゴリーに課題を見つけ、 柔軟に練習内容を変更しながらそれらに向き合って います。部活と勉強を共に高い意識を持って取り組 んでおり、暁星の伝統的なモットーである文武両道 を遂行しています。

暁星中学校サッカー部

中学3年 関 彰良

<練習への取り組み>

中学の練習は週6日、火曜から日曜で日曜は試合が入ることがある。練習には矢川先生、吉田先生、稲葉コーチなど多くのコーチが関わって下さっている。中学の練習は全てボールを止めて蹴るが基本となっている。

<試合成績>

T3リーグ

• 前期 最終順位3位

昨年の結果に伴い、T2からT3リーグに降格して挑んだシーズンだった。戦績は4勝1敗2引き分けという結果だった。接戦をものにできた試合もあったが、土壇場で追いつかれて引き分けた試合もあり、チームとして多くの課題が見つかった。

・後期 5試合残して3位

前期の結果により、上位グループでの戦いとなった。初戦の石神井マメックスで3-0と快勝したことによりチームに良い雰囲気が出たが、続く修徳中学校戦では悪い流れを修正できず、0-4と大敗してしまった。しかし、その後の2試合

を5-0、4-0と勝利することができた。

東京都中学校サッカー選手権大会 ベスト 16

支部大会から始まり本戦3回戦までの、計5試合という短い戦いだった。昨年東京都優勝という成績だったこともあり、チーム全体がプレッシャーを感じ、初戦から緊張していた。また、主将の有働が怪我のため、私が代理を務めた。

- ・本戦1回戦 vs 木曽中学校 1-0 前半に決定機を数回作るも決めきれず、後半、 加納のフリーキックに鈴木(喜)が頭で合わせ得 点し、1回戦を突破した。
- ・2回戦 vs 本郷中学校 3-2 前半に川迫、鈴木(喜)、関が得点し、リード を守ったまま2回戦を突破した。本郷中学とは練 習試合をよく行っており、負ける試合のほうが多 かったが、この試合は暁星の方が気持ちで勝って いた。それが結果に結びついたのだと思う。
- ・3回戦 vs 東海大菅生中学校 0-2 一方的に攻められている試合ではなく、互角の 戦いをしていたが、決定機を決めきれなかったこ とが勝敗を分けた。チームとしても、個人として も悔いが残る試合だった。

<この3年間で得たもの>

まず、個人としては戦う心を得た。2年生の時に3年生の試合に呼ばれてから、同学年の人達にも、 先輩にも負けたくない、試合に出たいという思いで練習をしていた。その中で、戦う心を手に入れた。 チームとしては、コロナによって活動時間が少なく、1度も合宿に行けなかったことが残念だった。そのような中でもしっかりと練習でコツを掴み、自主練習などを積み重ねることによって上手くなっていった。練習した分、上手くなっていく。そのことを最も実感することができたと思う。

この3年間で得たものは、戦う心、技術、負けない体、そして最高の仲間だ。

暁星小学校サッカー部

小学校教諭・サッカー部コーチ 折田 憲彦(2001年卒)

暁星アストラジュニアは、2021年度まで「三井のリハウスリーグ第7ブロック Aリーグ」に所属していました。昨年度の6年生の結果は、10チーム中1位(9勝1分け)となり、上位リーグの東京都2部(T2)への入れ替え戦の機会を得ました。

T2への入れ替え戦は、新年度のチームで行なわれました。昨年度末、5年生が11ブロック(稲城・多摩・町田市)・3ブロック(練馬区)・東京女子トレセンの4チームでのリーグ戦を行い、見事2勝1分けで1位となり、T2への参入の権利を勝ち取ることができました。

今年度はレベルの高い相手とリーグ戦を行い、前期は11チーム中9位(2勝8敗)ですが、良い相手と良いグランドで公式戦することができ、良い経験を通してサッカーのレベルも上がってきています。

今後は後期リーグ・全日本少年サッカーと公式戦が続きますが、リーグ戦は上位チームからも勝ち星を挙げたいですし、全日本はT2に参加していることでブロック大会免除の都大会からの出場なので、1つでも上を目指して頑張ります。

また、十数年振りに夏休み期間に小学校の人工芝 が張り替わり、子どもたちにとってますますサッカーに励める環境が整ってきています。

高校かるた部 2022 夏

中高教諭・競技かるた部顧問 青木 太朗

高校かるた部は、本年7月23日(土)に滋賀県の近江神宮で行われた「小倉百人一首競技かるた第44回全国高等学校選手権大会」に東京都代表として出場し、準優勝することができた。過去13回の優勝に対して、準優勝は16年ぶり4回目。OB諸氏にとっては物足りない結果に映るかもしれないが、選手たちは実力以上の力を出し切った。

団体戦は5組が一斉に試合をし、3人勝ったチー

ムが勝ちである。今年度の東京都は、昨年の決勝で 暁星に惜敗した都立白鷗にはA級選手2名が残り、 さらに東京都予選直前の大会で1人A級に昇級する など、着実に力をつけている。また、近年戦力が充 実した関東一には全国小学生チャンピオンの実績を 持つA級選手が入学し、やはりその後1名が昇級し A級2人となる。対して暁星は、A級1名を中心に 練習を重ねるものの、大会で結果を残すことができ ないまま今年度を迎えた。

高3が10名。中1から一緒にやってきたメンバーだ。この時期までこれだけの人数が残るのは珍しい。 互いの長所短所をよく理解し、練習ではそれぞれの 課題を指摘し合うなど、仲間同士で高め合う姿勢が 身についている。チームワークは申し分ない。しか し、5月に開催された大会でも結果を残せず、ライ バル校との実力の差を思い知らされると同時に、い よいよ危機感が募った。

この時に手を差し伸べてくれたのが OB だ。週末だけでなく、平日の練習にも顔を出す卒業生もいた。彼らの中には、10 連覇を目指しながらも予選敗退を経験したり、全国大会の予選トーナメントで敗れる経験があったり、連覇を目指しながらもコロナ禍で大会そのものが中止となり不完全燃焼のまま終わったメンバーもいる。さまざまな思いを抱いた先輩方が、技術面だけでなく、全国大会への思いを託すかのように、熱心に練習に来てくれた。東京都予選のある6月上旬までの短期間、選手たちは濃密な、厳しくも充実した時間を過ごした。

今大会は、コロナ前に戻り東京都からは2校が出場できる。6月5日の予選で1校を決め、2週間後の最終予選でもう1校を決める段取りだ。5日、白鷗を破り勢いに乗る関東一と決勝で対戦した。相手のA級選手と当たったB級選手が終盤までリードを続け相手のペースを崩し、堂々と勝ち抜き全国大会出場を決めた。

しかし、まだまだ全国に通用する実力ではないことを選手たちはよく自覚していた。引き続き OB に来てもらい、厳しい練習を重ねた。それは大会の直前まで続いた。

全国選手権は、8ブロックに分かれ61校が参加する予選トーナメントと、各ブロック1位の8校で

行う決勝トーナメントとから成る。登録メンバー8名は全員3年。残る2人の3年生も、マネージャーとしてサポートをする。初戦は千葉県の成田、2回戦は青森県の五所川原を倒し、3回戦は栃木県の宇都宮女子。実力伯仲で厳しい展開が予想された。試合は一進一退でなかなか勝ちが見えないまま終盤までもつれ、やっとのことで勝ちきることができた。そのことでチームのムードは高まり、準々決勝は群馬県の前橋女子、準決勝は宇都宮と関東勢を相次いで倒し、決勝は千葉県の渋谷教育学園幕張と対戦する。一緒に練習する機会の多い学校で、互いに実力を熟知している。終盤まで優勢であったが土壇場で逆転されて準優勝となった。

控室に戻り、しばらくは涙をこぼすだけで誰も声を出すことのできない時間が続いた。重苦しい時間でもあり、敗戦を受け入れるのに必要な時間でもあった。選手たちは本気で、心の底から悔しがっていた。それは、決勝まで勝ち上がることができたからこそ味わえる悔しさだった。それ以前に負けていれば、こんなにも胸の詰まるような苦しい思いをすることはなかったはずだ。長い沈黙の後に監督の田口先生が「君たちを責める人は誰もいない」とおっしゃった。その言葉でようやく顔を上げ、前を向くことができた。

閉会式では全ての思いを胸にしまい、堂々と整列し表彰を受けた。選手たちにとってこの銀メダルがこれからの人生の糧となったり、あるいは進みかねている時に後押ししてくれる力になったりすることを願う。いずれ、いい時間を過ごしたかけがえのない夏休みであったと振り返ってくれる日が来るであろう。マネージャーや練習に関わった後輩たちを含め、そういう大きな思い出を自らの手でつかみ取った諸君に敬意を表したい。よくがんばった。お疲れさまでした。

最後に、ここまで部員たちを導いてくれた OB の皆さんにも感謝申し上げます。皆さん一人一人が持つ、長い間受け継がれ続けてきた全国大会への思いは、この夏、しっかりと選手たちに、また後輩たちに伝わったはずです。ありがとうございました。

前回準優勝した時、選手が悔しがる姿を中学生が見ていました。その中学生が高校生になった時から、

9連覇が始まりました。今回の選手たちの姿を後輩 たちはしっかりと見ています。ここから、かるた部 の新たな歴史が始まります。あたたかい目で見守り、 時には厳しいご指導、またご声援のほどをよろしく お願いします。

2022 年度の暁星水泳部の活動

水泳部顧問 宇田川 諒介

昨年度に続き今年度もこの場をお借りして暁星水 泳部の活動報告をさせていただけることになり、と ても感謝しています。今年度も新型コロナウィルス 感染症の影響は少なからず水泳業界にも暗い影を落 としている中、大会運営を担当してくださっている 多くの方々のご尽力のおかげで、過去2年の状況か らは考えられないほど多くの機会が生徒たちに与え られました。顧問としても非常にうれしく思い、ひ とりひとりの部員の成長を実感できる貴重な時間を 頂きました。

例年、高校春季大会がシーズンの皮切りになります。全国につながる都大会と比べて出場条件が緩い大会ですが、おのずと人数が多くなるため、コロナ禍に入り、2年連続で行われなかった大会です。それが今年度は行われました。暁星からも多くの選手が出場することができました。

その後行われたのが、関東大会やインターハイへとつながる、都の選手権大会です。ここでは厳しい基準をクリアした選手のみが出場します。昨年度インターハイ優勝の高3山口遼大君をはじめ、少数精鋭ではありますが3名が出場しました。3人とも47都道府県でもトップレベルの東京都の精鋭達相手に大奮闘を見せてくれました。その後、山口君は千葉で行われた関東大会に歩を進め、そこでインターハイの出場権を得ます。しかし、インターハイの出場権を得ます。しかし、インターハイの出場は辞退しなければなりませんでした。なぜならば、山口君はインターハイとかぶる日程で派遣が行われる国際大会「第9回ジュニアパンパシフィック選手権」に日本代表で出場を決めていたからです。無論、高体連主催の大会ではないため、残念ながら顧問がハワイまで引率に行くことはかないませんで

した。

3種目で出場する山口君の応援は、日本から YouTubeの動画越しに行いました。結果、大本命の 50 m自由形で7位入賞という立派な戦果を挙げ、帰 国しました。初めての国際大会で本人は自らの泳ぎ に思うところもあったようで、多くの課題を得たよ うです。また、海外の選手とのコミュニケーション を楽しくとることができたと聞き、頼もしさを感じ ました。その後、山口君は栃木で行われた国民体育 大会(通称「国体」)に出場し、50 m自由形で優勝 しました。今年度も大活躍となりました。今年度で 彼は暁星の地から巣立ちますが、新天地でも着実に 実績を積んでいくはずです。引き続き見守っていた だけると幸いです。

9月に入り、高校は新人大会と長水路記録会が行われました。これにて暁星水泳部の高校生は全員が競技に参加することができました。多くの機会を設けてくれたことに強く感謝しました。そして、来年度から会場がアクアティクスセンターに変わり、今年度で辰巳の国際水泳場を使うことが最後になる予定なので、生徒たちはそれを噛みしめるように泳いでいました。

一方、中学の大会は、1学期には関東大会および全国大会予選を兼ねる都大会のみで、高校同様、かなり出場制限が厳しい大会のみが行われました。そこに出場したのが、中3河井桜輔君と中1河井一桜君の兄弟です。二人とも共通の2種目で出場し、桜輔君は優勝を飾った200mバタフライを含めた2種目で全国大会の切符を手にし、一桜君はやはり2種目で関東大会出場を決めました。そして、多くの選手を擁する強豪校ひしめくなか、2人のみで参加した暁星が総合で8位に輝きました。顧問が目を丸くしました。

茨城で行われた関東大会では一桜君が、宮城で行われた全国大会では桜輔君が、それぞれ素晴らしい泳ぎを見せました。全国大会では先の地震により、会場の50mプールが使えず、異例の25mプールを使っての競技になりました。桜輔君は50mプールでの競技を得意としているため、苦戦を強いられましたが、結果としてエントリーランキングより順

位を上げ、大会を終えました。この先も暁星水泳部が名を轟かせることになると思わされる夏となりました。

2学期に入ってからは、中学は学年別大会が行わ れました。これもコロナ禍に入って2年行われてい なかったものです。そのため、中学3年生であって もこれがデビュー戦である生徒がほとんどでした。 今年の暁星水泳部新1年生は16人と、近年まれに 見る大所帯になっています。出場する30人弱の生 徒のほとんどが初出場ということもあり、顧問もい つも以上に緊張感をもって引率に臨みました。しか し、心配は杞憂に終わりました。先輩から情報を集 めた彼らは入念に準備をしてきており、大会出場経 験のある一部の生徒がチームをよく引っ張ってくれ たおかげで、出場した全生徒がしっかりと競技に臨 むことができました。そしてそれぞれが多くの成果 と課題を得て、大会を終えました。ちなみに、河井 一桜君が今大会において 50 mバタフライ (中1) で大会新記録を樹立しました。中2と中3の同種目 の大会記録は現高3の山口遼大君が持っているた

め、この種目の大会記録は暁星が総なめにした形となります。他の部員もそれに気づき、大いに盛り上がり、いい刺激を受けていました。

この文章を書いている時点で、残り 11 月の千代 田区大会が残っています。この大会はシーズンラストにして中学生も高校生も全員が出場できる大会です。それぞれの生徒がいい形でシーズンを締めくくれるよう、引き続き見守っていきたいと思っています。

現在、学校のプールサイドは、工事を行っている ため立ち入ることができません。今まで使われてい た石段がなくなったり、部室がなくなったりと生徒 たちは変化の真っ只中に立たされています。それで も今年度の大会や練習で彼らが見せてくれたひたむ きな態度や、仲間を慮った行動が、今後の暁星水泳 部を守り立てていくと確信させてくれています。皆 様も今後も水泳部の活躍を楽しみにしていただけま すとうれしいです。何卒応援よろしくお願いいたし ます。



初めて尽くし ~ 2022 年度中高エトワール祭

中高教諭・生徒会顧問 青木 太朗

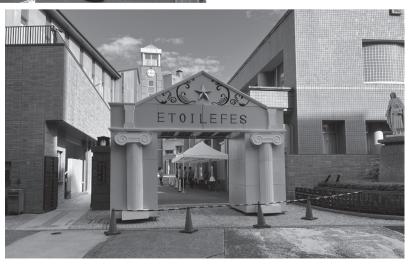
去る10月1日(土)と2日(日)、エトワール祭を開催した。一昨年は12月に有志参加のオンラインのみ、昨年度はギリギリまで開催を模索し、今年3月にオンラインおよび講堂での演奏企画限定のイベントを行い、門や場内装飾、垂れ幕を製作するにとどまった。

3年ぶりの開催である。中学生は全学年初めてのエトワール祭だ。経験のない中、手探りの状態で企画の決定、準備などを進めた。その際、頼りになるのが高校生のエトワール祭委員だ。例年、当日までの流れや段取りを熟知した委員が折に触れて各企画に指示を出し、指導をし、牽引していく。

ところが、彼らにとっても指導する立場になるのは初めてなのだ。通常であれば中3・高1の間に高2の先輩の仕事を傍で見て、引き継ぎをしっかりとし、満を持して運営に臨む。コロナ禍の2年の空白期間がそれを奪ってしまった。初めて企画を立ち上げる生徒と初めて全体を統括するエトワール祭委員とが、空白の2年間を取り戻さんばかりに全力で取り組んだ。

「初めて」はそれだけではない。入場者数を制限し、午前と午後の二部制にする。受験生とその保護者、卒業生などについては事前予約のシステムを作り、スマホなどのQRコードでチェックする。売店の食品販売は生徒限定で、事前申込制となる。飲食コーナーは十分なスペースを確保するために上グラウンドにする。調理場所も、従来の事務棟前から移動して職員室外の通路スペースとなった。こうした、





過去のマニュアルが一切通用しない中で、委員は議論とシミュレーションを何度も重ね、机とイスの移動のリハーサルをし、出来ることをやり尽くした上で当日を迎えた。

2日間とも快晴で、校舎内は各企画の呼び込みの 声と教室内のにぎわいとで盛り上がった。2年のブランクを感じさせない文化系クラブの展示、運動系クラブの体験コーナー、視聴覚教室での映像上映、ヘンリックホールのシャリテ古本市、講堂での音班ショーや教員バンド、演劇など、いつものエトワール祭の光景がよみがえった。新聖堂も公開され、多くの来場者が足を運んだ。前日にやっと届いたパンフレットは2日目の午後には無くなり、QRコードでダウンロードしてもらうこととなった。これもまた初めてのことで、委員諸君の柔軟な発想の賜物である。 そして、髙田裕和校長にとっても初めてのエトワール祭となった。教員有志による劇「いざこ座」に出演され、舞台映えする姿と絶妙な演技とで生徒から大喝采を浴びた。全校朝礼の実施が困難な状況下、多くの生徒にとって校長先生を身近に感じることの出来た貴重な機会であった。

来場者数は当初予定の80%から90%で、これといった混乱もなくスムーズに終えることができた。企画を進める側もそれを導く委員の側も次年度につながる良い体験となった。来年こそは、制約のない中で思い切り創造力と行動力を活かせるようなエトワール祭であってほしいものである。さまざまな関係者に厚く御礼申し上げます。





親子三代暁星制服物語

柳原 尚之(1997年卒)

父柳原一成は、暁星の制服が大好きだった。また、 父の語る暁星での思い出話は、制服に関するものが 多い。

令和4年1月29日。父の他界は突然であった。 その父が生前とても楽しみにしていたのが、孫の修 太朗(現在、暁星小学校1年)の制服姿。父の頃は まだ幼稚園が無かったので、自分自身も着た小学校 の制服を孫も着ている姿を、思い出と重ね合わせた かったのかも知れない。小学校入学も決まり、制服 の採寸も終わっていたが、まだ手元に届いておらず、 見せることが叶わなかったのが残念であった。

父の制服への思いは、小学生の頃からのようだ。 その頃、両親の仕事の関係で一時伊豆熱海に引っ越 し、地元の小学校に転校する話が出た。一度その小 学校を見学に行ったときに、まだ戦後まもなくとい うこともあり、小学生達はわらじや下駄で登校して いた。それを見た父は、「暁星の制服と革靴を脱ぎ たくない」と、転校を頑なに拒んだ。あまりにも意 地を張るので、結局両親が折れて、父だけ母親の実 家に住み、そこから通うことになった。父の意地っ 張りの性格は、小学生の頃からのようだ。

一方、制服を大事に着ていたかと思えば、制服での笑い話も幾つかある。父は中学高校と生物班に所属していて、大の生き物好きである。家の屋上では伝書鳩を飼い、寝室の布団の周りは熱帯魚などの水槽に囲まれてその中で寝ていた。そんなある時、上野の不忍池を通り帰宅している最中、池の中に鯉を発見した。どうしても家に持って帰りたいと一成少年は考えた。しかし、ビニール袋などない時代。どうしたかというと、制服のズボンの足の部分を結んで、袋状にして水を入れ、鯉を家に持って帰ったそうである。また、飯田橋の外堀でメダカを見つければ、制帽に入れて都電に乗って帰った話も聞いたことがある。どちらも、父の祖父母にこっぴどく叱られた、と笑って語ってくれた。

親子三代で袖を通す七つボタン。私が息子の制服 姿を見てしみじみと心に抱く気持ちを、父もかつて 私の制服姿を見て、同じように思ったのだろうか。 息子の入学式の日に、父のことを想った。

同窓会の皆様へ

暁星の同窓の皆さんには、父が逝去の折、本当に 多くの方からご心配や配慮をいただきまして、深く 感謝申し上げます。毎年の同窓会を楽しみしており ました。これからも三六会のご盛会お祈り申し上げ ます。

柳原一成氏(1961年卒)プロフィール 近茶流宗家。柳原料理教室主宰。東京農業大学客員教 授、儀礼文化学会常務理事、日本醤油技術センター 理事。

1942年、先代宗家・柳原敏雄の長男として東京に生まれる。暁星小、中、高を卒業。その後、東京農業大学農学部造園学科卒業。東京・赤坂の柳原料理教室にて、家庭料理から懐石料理まで幅広い日本料理の指導にあたる一方、NHK人気番組「きょうの料理」には1973年から出演。わかりやく、時にはユーモアを交えた語り口は人気を博した。季節の和食や伝統食にも造詣が深く、自ら野菜や蜜蜂を育て、魚を釣り、日本全国の食材を訪ねてまわるなど、食材そのものへの研究にも力を注いでいた。

著書に「懐石近茶流」「近茶流季節の味」(以上、主婦の友社)、「和食」「柳原一成の和食指南」(以上、日本放送出版協会)、「料理教室 おうちごはんのススメ」(共同通信社)、「ちゃんと作れる基本の和食」(マガジンハウス社)、「季節の手仕事」(柳原尚之との共著)ほか多数。



柳原一成氏近影



修太朗くん入園式の日

二代目中村吉右衛門さんを偲んで

同窓会理事 観劇担当 目良 純一郎(1984年卒)

私が初めて旧歌舞伎座を訪れたのは、2006年の春。暁星出身の歌舞伎関係者も多く、当時理事であられた古屋先輩に連れられ、顔パスになるまでほぼ毎月楽屋訪問しておりました。古屋先輩は松本白鸚さんと同級であり、弟の吉右衛門さんとも親交が深く、ご紹介を受けて観劇担当を引継いだ際はTVで見ていた鬼平!弁慶!!と、感動とともに緊張しておりましたが、"あまり気負わず、気軽にいらっしゃい"と、にこやかに接してくださり、恐縮したのを覚えています。

その年の秋から、初代中村吉右衛門の藝の顕彰と 継承を掲げた「秀山祭」が始まり、歌舞伎座の九月 行事として定着します。いつも大変な盛況で、楽屋 もごった返しておりましたが、お忙しい中でも楽屋 訪問の際は奥さまも暖かく迎えて下さり、以後も毎 年、楽屋にお邪魔させていただくようになりました。

また、秀山祭では暁星学園同窓会から観劇を申し 込まれた希望者には"暁星のために"と、特別に楽 屋訪問の許可を賜り、お疲れの合間に歓談をして下 さいました。

2011年に「重要無形文化財保持者」、いわゆる「人間国宝」の認定を受けられ、同窓会からもお祝いすることとなりました。当時の浅尾会長の命に従って私がご挨拶に伺い、"本日は人間国宝になられましたお祝いに参りました!"と進言すると、"はいはい、では口上を承りましょう"と、楽しそうに正面に正座されました。緊張して大汗を搔きながらお祝いを述べましたことは忘れられない一生の思い出です。



2011年9月10日 (人間国宝認定のお祝い)

2013年には歌舞伎座が60年ぶりに建て替えられ、楽屋もピカピカになっておりました。歌舞伎座新開場杮葺落公演(四月・五月・六月で毎月三部構成、全21演目)が行われ、当然、私は全演目を観劇。「小僧の手習い」程度で畏れ多くも吉右衛門さんにお話を伺ったこともありました。素人の質問にも丁寧な解説をしていただき、誠に申しわけない限りですが、本当に楽しいひと時でした。



2013年1月13日(杮葺落公演)

2015年の秀山祭では、床の間に、吉右衛門さんが大好きな「くまのプーさん」が飾ってありました。



2015年9月16日 (第10回 秀山祭)

2018年の秀山祭には、同窓会の横山会長がフランス大使をお連れして楽屋訪問されました。また、同窓会員もお邪魔させていただき、皆さま感動されておりました。



2018年9月 (第13回 秀山祭)



2018年9月(第13回 秀山祭)

コロナ禍で 2020 年、2021 年の秀山祭は公演中 止となる異常事態で、今思えば、2019 年の秀山祭 が最後にお目に掛かれた日となってしまったのは残 念でなりません。

ご承知の通り、2020年10月に手術を受けられ、 人並み外れた気力で公演に復帰されるも、2021年3月の千穐楽前夜に緊急入院、闘病生活を続けておられましたが、11月28日に御帰天されました。 今年は3年ぶりの「秀山祭九月大歌舞伎」でしたが、「二世中村吉右衛門の一周忌追善」として公演、出演された役者の方々はもとより、公演を観に来られたお客さんからも惜しむ声が多く聞かれました。



2019年9月23日(吉右衛門さん最後の秀山祭)

吉右衛門さん、いつもにこやかで温かで、その優 しいお人柄は皆に慕われておりました。

表現者として秀抜なご功績を偲ぶとともに、心から哀悼の意を表します。天においても、素晴らしい藝能を続けられるものと思います。暁星学園同窓会に賜ったご厚情、素敵な笑顔を、我々はいつまでも忘れません。



